

『手品師 (05/11)』

シルクのハットから  
手品師は  
鳩を見せる  
シルクのハットから  
手品師は  
兎を見せる  
シルクのハットから  
手品師は  
旗を次から次と  
引っ張りだす

拍手の中で  
私は眠りを覚ました  
どうやら彼から  
睡眠術をかけられたらしい  
眠りは心地好かった  
何もかも幸福感で満ちていた  
シルクのハットから  
手品師は  
カードを出す

ダイヤやハートが  
何時のまにか  
ハンカチにvari  
傘にvari  
最後に兎にかわった

素晴らしい  
手品師は拍手を浴びている  
彼はにこやかに頭を下げながら  
舞台の上で  
観客を堪能させえた喜びも  
手品師は幾度も幾度も  
人生へ感謝をしていた

『夜と街灯 (05/24)』

深閑の暗闇の中を  
街灯がぼくと灯っている  
道行く人もいない深夜を  
消えたっていいじゃないか  
何を照しているのだ  
何を灯しているのだ  
消えたっていいじゃないか  
誰も往来をしない道を

みんな寝静まった路を  
何が面白くて照っているのだ  
何が面白くて灯しているのだ  
暗闇の深閑が佇まいを  
じくと街灯が照らしている  
誰も通らない路を  
じくと街灯は灯している  
過ぎ行く時を  
じくと照らしている  
暗闇の佇みを  
じくと灯している

『涙 (05/24)』

雨が降る降る  
雨が降る  
天の涙の雨が降る  
濡れて肌にはのかなる  
天の涙の温もりよ  
濡れて知りました  
銀色涙の温かさ  
濡れて知りました  
人の涙の温かさ

流す涙の温かさ

雨が降ります  
雨が降る  
天の涙の銀色雨が  
濡れて知ります  
人の涙の温かさ

『我が身 (05/25)』

ひとり痛みに耐えかねて  
彷徨う深夜の街並みは  
灯りも消えた通り道  
マネキン女のすぐ脇へ  
疼く痛みにひきずった  
ゆがんだ顔が写ります  
人の消えた通り道  
灯りも消えた通り路  
ひとり耐えかね彷徨います

少しの気休めと  
少しの気分転換を  
少しばかりの

我が身への慰みと  
彷徨い歩き出たものの  
曲がらぬ膝に苦痛し  
月夜の影に  
疼き痛む身体を啞然とする

ガラスに写る  
我が身の醜さよ  
疼く身体の醜さよ  
眠らなければ  
安らぎがない我が身体よ  
憩う時もない私の身体よ  
疼きひきずった顔よ  
眠ろうにも  
痛みで眠ることが無い  
ああ私の身体よ

ひとり痛みに耐えかねて  
彷徨う深夜の街並みは  
灯りも消えた通り道  
マネキン女のすぐ脇へ  
疼く痛みにひきずった  
ゆがんだ顔が写ります  
人の消えた通り道  
灯りも消えた通り路

ひとり耐えかね彷徨います

『希望 (05/27)』

ゆらりゆらり  
揺れている  
今にも消えそうに  
揺れている  
私の命が燃え炎

海原の中で  
燃える術(すべ)をなくした  
私の命よ  
消えて暗黒が海へと  
飲まれて行くのか

微かに揺らぐ  
私の命火が燃え炎  
くべる薪は  
波間の彼方に  
あると云うのか

命を燃やす希望が  
ゆらりゆらりと  
消えて行く  
私の命が燃え炎  
私の命が燃え炎

『鳥  
(05/29)』

地上のあちこちを  
空の至る所を  
自由に翔び回る  
あ：あ：あ：あ：あ：  
鳥よ鳥よ鳥よ  
そんな自由が  
素晴らしいのですか

人間の掟を離れて  
自然の掟が  
どんなにか素敵だと  
云うのですか  
厳しい厳しい  
自然の掟の方が  
人間の掟よりも  
自由だと云うのですか

弱ったら誰もが  
自然の掟の内では  
生きて行けないのですよ  
人間の掟の中なら  
生きて行けるのですよ  
それでも  
自然の掟の方が  
自由だと云うのですか

end of diary-poem(05)

『自画像』

メイクを落としながら  
道化師は己れを見た  
素顔が鏡に映る  
手の動きが止まった  
お前は何者だ  
鏡の素顔が問いかける  
彼は目を瞑り  
それから息を吐き  
深く奥へと大気を吸込んだ  
お前は何者だ  
目を開いた道化師は  
所々メイクが残っている

自分の素顔を睨んだ  
心の奥底へ吸込んだ物を  
彼はゆっくりと吐きだした  
幾つもの訪れた町々  
過ぎ去った数多の憧憬  
道化師の瞳に浮かんで  
消えて行った  
メイクとともに落としては  
消えて行った  
素顔になった自分が  
道化の自分をじっと睨んでいる

『旅人(道化)』

氷雨混じりの日でした  
トランクを持った男が一人  
野原に張ったテントへと  
入って行きました  
ローソクの灯りの中で  
幾多の町を旅した悲しみを  
凍えながら戯け演じました  
メイクの顔と縦縞の衣装が  
観客の目を楽しませるべく  
笑いを誘うのです  
そうなのです  
観客の楽しい笑いではなく

彼は悲しい笑いをしなくては  
失格なのです  
道化と云うよりも人間を

『サーカス(道化)』

町にサーカスがやって来ました  
象やライオンや  
美しい女の人もおりました  
でも私の好きなのは  
あの道化のおじさんでした  
おじさんはいつも  
知らない町の話をしてくれました  
きまって最後に言ったのは  
坊やもうお帰り  
お母さんがお家で心配しているよ

月日がすぎた雨の日  
小さな町でおじさんに出会いました  
ひとり旅の中で  
道化のおじさんに巡り逢いました  
顔に化粧して  
長い積もる話とコーヒを飲みました

町にサーカスがやって来ました  
象やライオンや  
美しい女の人もおりました  
でも私の好きなのは  
あのおじさんはいませんでした  
私が覚えている  
おじさんと言え  
いつも淋しい笑顔でした

『道化師(道化)』

ラッタッタッタッタ  
ラッタッタ  
おいらは道化師  
笑い売り  
楽しい楽しい笑い売り  
お一ついかが  
お二ついかが  
楽しい楽しい笑い売り

ラッタッタッタッタ  
ラッタッタ  
恋心に悩む娘さん  
さあさあ占いましょう

貴方の恋の成就を  
どこの野原にもある  
四葉のクロバー  
さあ自分の胸に手を当てて  
私はあの人を愛しています  
と言うのです  
ラッタッタッタッタ  
ラッタッタ  
それから葉の一つを千切るのです  
一緒になれないって  
今度是一緒になれるって  
葉を千切るのです  
また一緒になれないと千切って  
最後の一葉が残りました  
さあ言う言葉は一つです  
一緒になれる！

ラッタッタッタッタ  
ラッタッタ  
私は道化師恋の占いし  
ラッタッタッタッタ  
ラッタッタ  
私は道化師笑い売り

『サーカス二(道化)』

そのテントの中では  
千の心が笑っていた  
一つの心の道化師へ  
千の言葉が一つになって  
一つの心が  
千の言葉になって  
テントは笑いの渦で揺れた

空中ブランコの生活だった  
綱渡りの生活だった  
老人は自分の人生を振り返り  
若者たちは  
空中ブランコのスリルに興奮し  
綱渡りの緊張に感動し  
自分の人生を生きようとしている

テントの中は  
千の笑いが渦巻いていた  
千の心が一つになって  
道化の一つの心が  
千の言葉となって  
人生の善き日を瞳に浮べていた

『旅人二(道化)』

ツンクルトンクルツンクルトン  
わたしや気軽な旅人よ  
腹が減ったら野苺食べて  
水を呑みたきや谷の水  
寝るときや満天星々だらけ

ツンクルトンクルツンクルトン  
わたしや呑気な旅人よ  
犬が吠えりや  
がきん子の石粒で  
そこでおいらは叫ぶのだ  
ーこの村よ湖になれ村人よ魚になれ!

ツンクルトンクルツンクルトン  
やがて四季おりおりには  
詩人が訪れては  
湖に舟を走らせ詩を唄い  
魚を捕っては食べました

ツンクルトンクルツンクルトン  
わたしや春の旅人道化者

『野道(道化)』

ツンクルトンクルツンクルトン  
わたしや夏の旅人道化者  
ツンクルトンクルツンクルトン  
わたしや秋の旅人道化です  
ツンクルトンクルツンクルトン  
わたしや冬の旅人道化師よ  
ツンクルトンクルツンクルトン  
ツンクルトンクルツンクルトン

月に照された野道へ  
道化師が現われて  
たった一人歩いている  
深夜の野道を  
戯けながら未来へと  
旅人は歩いている  
淋しさを舞って  
悲しみを舞って  
月の明かりに  
戯けの舞は照されて  
深夜の闇を背景に  
道化師は未来へと  
夢を追い続けて歩いている  
月夜の野道を  
煌めいている星を観客に

旅人は舞戯け  
明日へと歩いてる

『道化師二(道化)』

コチコチ  
コチコチ  
巻き忘れた時計が  
何かに揺れて  
動き出した  
おーい誰か居るのか  
道化師は耳を澄ました

風の吹く音がし  
暗幕が揺れ  
コチコチコチ  
コチコチコチ  
始めはゆっくりと  
すぐに早く  
それから針が止まってしまふ  
.....

道化師は眠りの中で  
夢を見ていた  
延々と続いている道の上で  
独り立っている

『旅人三(道化)』

暗い窓に煙草の煙が  
ビロードのように広が  
車内へと消えている  
その向こうに樹々を田畑を  
山も川も野原も町をも隠した  
暗黒の闇が  
次から次と後ろ去って行く  
客のまばらな中で  
無性に寂しい時間は  
刻々と過ぎ行き  
スチームの暖かさに  
やり切れなくなる  
人生の苦酷を耐えてきた  
旅人の老いた顔が  
単調なりズムの中で  
じつと目を閉じている

『道化師三(道化)』

すべては矢のようにすぎ  
時は帰らず  
いにしえの出来事が  
溢れるように心に満ち  
道化師は捕ろうと手を延ばす  
老いた父母へと  
昔の日々が涙に走り  
一人黙祷す

千の心の笑い響き声で  
道化師は我に戻り  
戻らぬ日々を一人舞う  
笑いと陽気の観客が渦の中で  
道化師は一心に  
戯けに戯けを舞っている  
矢のように過ぎて行く  
時を捕まえようと  
過ぎ行く時を捕まえようと

『道化師四(道化)』

音もなく  
音もなく  
心に寂しさが訪れ  
千の笑いへと溶かす

瞳には笑みを見せて  
心へ忍び寄る寂しさを  
千の観客の寂しさを  
道化師は一心に聞き取り  
千の観客へと  
道化師は泣きながら  
笑みを浮べて戯け舞う  
千の笑い声に安堵し  
生きだけを頼りに  
道化師は戯け舞う  
音もなく  
音もなく  
道化師は戯け舞う

『サーカス三(道化)』

町の広場のテント小屋  
小雨に煙りしとしと  
静かに静かに打たれてる  
背中に聞こえる笑い声  
背中に沁み込む憩い渦  
喜びも悲しみも  
道化の瞳に映っている  
寂しさも苦しさも  
その目の底に沈んでいる  
子供の頃の寂しさが

道化の瞳に燃えだして  
舞に舞う戯け道化の命舞  
心で泣いて舞に舞う  
雨に打たれる暗幕の中で  
千の心よ憩いよとばかり  
道化師は舞に舞う戯け舞  
町の広場のテント小屋  
雨に打たれて佇んで  
千の笑いの渦巻きを  
雨が静かに聴いている  
雨が静かに聴いている

『自画像二(道化)』

鏡の中の像が私を睨んでいる  
お前は誰なのだ  
何処から来て何処へ去るのだ  
白く塗ったお前の顔  
赤く染めたお前の鼻  
大きく縁取ったお前の瞳  
緑赤青黄紫白茶  
縦縞文様の衣装  
色とりどりの衣装を着た  
メイクの顔が私を睨んでいる  
暗幕の外は月が照り  
星たちがきらきらと瞬いて

深閑の闇が下りている  
晴れの日々を  
雨の日々を  
風の狂吠えする日々を  
雪の日々も  
縦縞衣装を着たメイクの顔が  
身動きもせず  
暗幕の裸電球の下で  
私をじっと自問している